

バックキャストイング再考

ながれ

大西 悟 (おおにし さとし/国立環境研究所・福島地域協働研究拠点)

カーボンニュートラルが多くの組織の目標となり、バックキャストイングに基づいた計画を目にすることが増えました。言葉や手法が一般的になるにつれ、根っこの考えが抜け落ちることはよくあります。当の私も福島県の自治体でゼロカーボンビジョンづくりやそれに基づく研究支援をしていますが、つい忘れがちになることを自戒し、暑い夏に筆をとります。

●描くべきは「理想」 WhatからWhyへ

「理想」と「現実」のギャップを埋めるのがバックキャストイングです。カーボンニュートラルの「理想」は、「温室効果ガスの排出量が実質ゼロになっている」状態。加えてwell-beingを高めることも大切です。

しかし、このところ削減目標が「ノルマ」のようにふるまう姿も見受けられます。自治体や企業のある部署に削減目標が課され、施策メニューが並んでいる状況(What:何をやるか?)です。それがお尻に火をつけるのも確かで、第一歩ともいえます。とはいえ、担当者は、そもそも計画づくりに参画していないことも多く、やらされている感もあるでしょう。

そのときに「そもそも何のためにやるのか?」「この町・企業、この部署、そして私にどんな良いことがあるのか?」という問い(Why:なんでやるのか?)が改めて出てくることは健全なことだと思います。その際に専門家として、「現実」に耳を傾け「理想」を見出していく態度は持ち続けたいと思います。

●「人」のキャストイング WhatからWhoへ

「理想」を前に、あるいは危機を前にしてすら「そうはいつでもさあ」と現状維持バイアスが働くのが人の特性です。それに対し、魅力的な「理想」とそれを実現する道筋の二つ

がセットで提示されると行動を変えるきっかけになります。

それがビジョンを描く人の仕事です。「現実」に足りないところを明らかにし、補うために人を育て、キーパーソンとつながり、必要な資金や資材を集めて現状維持と異なる新しい動きをしていく必要があります。このプロセスは、温室効果ガス排出と関係のない文脈・コンテキストで生じるものですが、とても大切な視点です。

そこから、登場人物のキャストイング(Who:誰が、誰とやるのか?)の重要性が見えてきます。誰がどんな動きをするとよいのか、その人たちの活躍を促す環境や場所は何か?などの解像度を高めることが大切です。国、企業、地域、個人の資本は限られています。その中でスーパーマンに期待したり、担当者に責任を押し付けるのではなく、適切に資本を投入し、組織のあり方の再考も含め見直す必要があります。

●実現にむけたプロセス WhatからHowへ?

「理想」を達成するなら、どんな手段をとってもよいか?そんなはずはないはずです。まず、倫理的・道徳的であることが求められます。では、最も効率の良いパスの直線に乗ればよいか?それも違う気がします。人間は全くもって合理的ではありません。だから、たくさんの試行錯誤があるでしょうし、それを積極的に促すことが大切です。

カーボンニュートラルは、科学的、政治的、技術的なフェーズを越えつつあります。今後、ますます統合的、創造的、挑戦的な動きが求められるでしょう。そして、そのプロセスで文化や芸術がうまれ、2050年以降を動かす力となることを期待しています。そう思い浮かべ、また「現実」と立ち向かうこととしましょう。